

# Implicit Association Test (IAT) の遂行経験は IAT 得点に影響するか？

—シャイネス IAT を例として—

稲垣 勉<sup>1,2</sup> 澤海 崇文<sup>1,3</sup> 澄川 采加<sup>1,4</sup>

<sup>1</sup> 教育テスト研究センター <sup>2</sup> 京都外国語大学 <sup>3</sup> 流通経済大学 <sup>4</sup> 泉台小学校

本研究の目的は、Implicit Association Test (以下 IAT) の得点に対し、IAT の遂行経験が与える影響を検討することであった。IAT は潜在的な心的傾性の測定に使用可能であるとされてきたが、繰り返し実施することで、その得点(効果量)が小さくなるという指摘がある。この点は、介入研究などにおいて繰り返し IAT を実施する上で無視できないことから、本研究では IAT の遂行経験の有無や経験回数、経験時期が、潜在的シャイネスを測定するシャイネス IAT の得点に影響を及ぼすか否かを検討した。2つの研究を通して、過去の IAT の遂行経験や経験回数、経験時期は IAT 得点に影響を及ぼさないことが示された。しかし、他の心的傾性を測定する IAT についても同様の結果が得られるかは不明であることから、今後は他の心的傾性を測定する IAT を対象に、同様の検討を行うことが望まれる。

**キーワード** : Implicit Association Test (IAT), 遂行経験, シャイネス IAT

## 1. はじめに

パーソナリティや態度、信念など種々の心的傾性の測定にあたっては、これまでは伝統的に自己報告式の尺度が多く使用されてきた。しかし、近年はこうした自己報告による「顕在的な」測定のみならず、自己報告によらない「潜在的な」測定も行われている。たとえばシャイネスを潜在的に測定した研究(e.g., 相川・藤井, 2011; Asendorpf, Banse, & Mücke, 2002; 藤井・相川, 2013; Sawaumi, Inagaki, & Aikawa, 2019)では、Implicit Association Test (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998; 以下 IAT) を用いて潜在的シャイネスを測定している。IAT は、PC 画面上に連続して表示される単語の分類課題を通して、特定の概念間の連合を測定する。カテゴリー次元(自己-他者)と属性次元(シャイな-社交的な)に関連する刺激語(e.g., 私, 友人, 控えめな, 進んでする)が表示され、各次元に対応するキーを押し、グループ分けを行う。可能な限り速く正確に行うという教示の下、カテゴリー次元と属性次元が組み合わせられた試行を2種類行い、「自己-シャイな(他者-社交的な)」の組み合わせ課題の所要時間が「自己-社交的な(他者-シャイな)」の組み合わせ課題の所要時間より短いほど、潜在的シャイネスが高いと判断される。IAT で測定した潜在的シャイネスの得点は、対人相互作用場面での姿勢の緊張など、自身での制御が難しい行動指標を予測する(Asendorpf et al., 2002)ほか、社会的望ましき反応尺度とは相関がないこと(藤井・相川, 2013)が報告されており、こうした点は測定上のメリットであると言える。

ところで、IAT は繰り返し実施することで、その効果量が小さくなるという指摘がある(Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003)。この点は、介入研究など繰り返し IAT を実施する上

で無視できない (Nosek, Greenwald, & Banaji, 2007)。Greenwald et al. (2003) の提案している  $D$  得点はこの影響を減じることが示されているが、本邦においてこうした観点から検討している研究は見当たらない。そこで、本研究では潜在的シャイネスを測定するシャイネス IAT (相川・藤井, 2011) を例に挙げ、IAT の遂行経験の有無や経験回数、経験時期が IAT の得点 ( $D$  得点) に影響するか否かを検討する。研究 1 では、IAT の遂行経験の有無が IAT 得点に影響するか否かを検討する。研究 2 では、研究 1 とは別のサンプルを対象に、IAT の経験回数および直近の経験時期が IAT 得点に影響するか否かも検討する。

## 2. 研究 1

### 2.1 方法

**2.1.1 参加者** 九州地方の国立大学に通う学生 58 名 (男性 24 名, 女性 33 名, 不明 1 名) を対象とした。

**2.1.2 手続き** Inquisit Web License を用いて、参加者にシャイネス IAT の遂行を求めた。他に複数の心理尺度への回答を求めたが、本報告では割愛する (研究 2 についても同様である)。その後、今回実施したような単語の分類課題の経験の有無 (「ない」「ある」「わからない」) について回答を求めた。なお、研究 1, 2 とともに、調査への協力は任意であり、不参加による不利益は生じないこと、途中で参加の意思を変更しても構わないことを説明し、同意した者のみ参加するよう教示した。

### 2.2 結果および考察

**2.2.1 シャイネス IAT の得点化** シャイネス IAT は  $D$  得点 (Greenwald et al., 2003) を求めた。この得点が高いほど、潜在的シャイネスが高いことを示す。研究 2 でも同様である。

**2.2.2 IAT 経験の有無による影響** シャイネス IAT の得点について、IAT の遂行経験者 ( $n = 18, M = -0.22, SD = 0.39$ ) と未経験者 ( $n = 40, M = -0.23, SD = 0.49$ ) の平均値に有意な差があるか否かを対応のない  $t$  検定によって検討した。その結果、IAT 得点の平均値に有意差はなかった ( $t(56) = 0.03, p = .97, g = 0.01$ ) ため、IAT の遂行経験の有無は IAT 得点に影響を及ぼさないことが示された。

## 3. 研究 2

### 3.1 方法

**3.1.1 参加者** 九州地方の国立大学に通う大学生 122 名 (男性 40 名, 女性 82 名) を対象とした。

**3.1.2 手続き** Inquisit Web License を用いて、参加者にシャイネス IAT の遂行および複数の心理尺度への回答を求めた。その後、(a) 研究 1 と同様の質問と、IAT の遂行経験がある場合は (b) 経験回数 (「1 回」「2 回」「3 回以上」)、(c) 直近の経験 (「1~2 ヶ月以内」「2~4 ヶ月以内」「4~6 ヶ月以内」「6 ヶ月より前」) について回答を求めた。(b)、(c) の質問については、経験がない場合は「該当なし」を選択するよう教示した。

### 3.2 結果および考察

**3.2.1 IAT 経験の有無による影響** 研究 1 と同様の分析を行った。この際、IAT の遂行経験の有無を「わからない」と回答した 6 名は分析から除いた。その結果、IAT 経験者 ( $n = 48, M = -0.16, SD = 0.37$ ) と未経験者 ( $n = 68, M = -0.20, SD = 0.40$ ) の間で、IAT 得点の平均値に有意差はみられなかった ( $t(114) = 0.59, p = .55, g = 0.11$ )。この点は研究 1 を再現する結果である。なお、IAT の遂行経験の有無を「わからない」と回答した参加者 6 名を「経験なし」と扱って分析した際も、結果は同様であった ( $t(120) = 0.64, p = .52, g = 0.12$ )。

**3.2.2 経験回数による影響** IAT の経験回数を独立変数、IAT 得点を従属変数とした分散分析を実施した。この際、該当なしを選択した 73 名は経験回数 0 として扱った。分析の結

果、経験回数の主効果は有意でなかった ( $F(3, 118)=1.33, p=.27$ , 偏  $\eta^2=.03$ , IAT 経験の回数ごとに、0回(「該当なし」選択者):  $n=73, M=-0.21, SD=0.41$ , 1回:  $n=32, M=-0.08, SD=0.37$ , 2回:  $n=11, M=-0.31, SD=0.40$ , 3回以上:  $n=6, M=-0.17, SD=0.20$ )。したがって、IATの経験回数はIAT得点に影響を及ぼさないことが示された。なお、3回以上の経験者が少なかったため、経験回数が2回の群とまとめて「2回以上( $n=17$ )」として同様の分析を実施した際も、結果は同様であった ( $F(2, 119)=1.75, p=.18$ , 偏  $\eta^2=.03$ )。

**3.2.3 経験時期による影響** 1~2ヶ月以内(3名)や2~4ヶ月以内(2名)の経験者が少なかったことから、6ヶ月を基準として2群を設けた(直近6ヶ月以内:17名, 6ヶ月より前:32名)。この際、「該当なし」を選択した74名は分析から除いた。分析の結果、6ヶ月以内の経験者( $M=-0.15, SD=0.35$ )と6ヶ月より前の経験者( $M=-0.16, SD=0.38$ )との間には、IAT得点の平均値に有意差はみられなかった ( $t(47)=0.07, p=.94, g=0.02$ )。したがって、IATの遂行経験の時期もIAT得点に影響を及ぼさないことが示された。

#### 4. まとめと今後の課題

2つの研究を通じて、IATの遂行経験および経験回数、直近の経験時期はIAT得点に影響を及ぼさないことを確認することができた。ただし、本報告はあくまでD得点に対して遂行経験の影響の有無を検討したのみであるため、今後は従来の得点化の方法(Greenwald et al., 1998)と比してD得点の有効であるか、という点の比較が必要であろう。

また、他の心的傾性を測定するIATについても同様の結果が得られるかは不明であるため、今後は他の心的傾性を測定するIATを対象に、同様の検討を行うことが望まれる。

#### 4. 参考文献

- 相川充・藤井勉(2011). 潜在連合テスト(IAT)を用いた潜在的シャイネス測定を試み 心理学研究, 82:41-48
- Asendorpf, J. B., Banse, R., & Mücke, D. (2002). Double dissociation between implicit and explicit personality self-concept: The case of shy behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83:380-393
- 藤井勉・相川充(2013). シャイネスの二重分離モデルの検証—IATを用いて— 心理学研究, 84:529-535
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74:1464-1480
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85:197-216
- Nosek, B. A., Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (2007). The Implicit Association Test at age 7: A methodological and conceptual review (pp. 265-292). In J. A. Bargh (Ed.), *Automatic processes in social thinking and behavior*. Psychology Press.
- Sawaumi, T., Inagaki, T., & Aikawa, A. (2019). Does conventional Implicit Association Test of shyness measure “self-shyness” or “others-shyness”? *Japanese Psychological Research*, 61: 142-150

付記 本研究はJSPS科研費17K13902および20K14132の助成を受けた。ご協力いただいた参加者のみなさまに感謝申し上げます。

